

# 「キール法典」仮訳（上）

稲 元 格

## 1. はじめに

以下において訳出するのは、G. コルレンの『北ドイツ都市法Ⅱ——最古の形態におけるリューベックの中世低地ドイツ語都市法——』<sup>(1)</sup> に収められた、13世紀後半から14世紀半ばまでに書かれた中世都市リューベックの法典である。これは、かつてキールの市参事会文書館に保管されていたことから「キール法典 (Kieler Kodex)」と呼ばれている。現在はリューベック市文書館に写真版 (Fotoband) として残されている模様である。

この法典の歴史的な特徴については、訳者も既に別稿において論じておいたので<sup>(2)</sup>、ここでは割愛するが、コルレンの詳細な言語学・訓詁学的な作業によって、この法史料が今日でも、最も本来の形態に近い——ただし、第一次史料ではないが——信頼性の高い中世都市法史料の一つであることは間違いない。さらに、訳者はその後リューベックの他の法典類も一応目を通し、この法典が、当時の「公的な」法典であったのみならず、その後のリューベックの法典類の展開の基本的な枠組みも提供していたということ、即ち、その後の法典類が、内容的にも、この法典を基礎におきながら展開していたということを確信するにいたった。換言すれば、キール法典の、中世リューベックの法典としての重要性がますます鮮明になってきたのである。それゆえ、この法典の邦訳を試みることは、中世リューベック法の実態解明を容易にするのみならず、我が国のように、わずかの都市法史料のみの邦訳が上梓されているにすぎない場所では、その共通の史料的な蓄積に幾分貢献することにもなるであろう。

ところで訳者は、前述の別稿で、既に幾つか条文の内容を紹介しておいたが、当時は、紙数の関係で、かなりの不動産に関する条文の紹介も割愛せざるをえなかった。従って、早い機会にこれらの条文については、その邦訳を示したいと考えていた。本稿は、この意味で、言わば旧稿の史料的な補論という意味合いも持たせている

が、ここでは、すべての条文の邦訳を試みているので、前者の条文に特に注釈をつけることは、原則として、行っていない。

この法典の最初の試訳は、訳者がドイツに一年間留学した1986年にまで遡る。ハンブルク大学のラントヴェーア教授の下で最初に着手した作業が、この法典の現代ドイツ語への転訳であった。その際、教授は訳者の拙い訳に目を通し、しばしば的確な教示と忠告を惜しまれなかった。ここであらためて教授に深甚なる謝意を表したい。以下に掲げる邦訳も、訳者の全くのオリジナル作品とは言えない。しかし、少なくとも日本語への翻訳は訳者の責任において行っており、先述したように、その後、他の法典類にも目を通したので、その時の拙訳を本稿でそのまま再現している訳ではない。

ここで訳出するキール法典は、上述のコルレンの前掲書の83頁から158頁に収録された、全部で257条からなる中世低地ドイツ語の条文である。彼が扱った写本には、この「狭義」の条文の前に、モデナ (Modena) 司教であったヴィルヘルム (Wilhelm von Savoyen) の懇願により、1240年にリューベック法がある都市へ授与された、という「授与文書」が収められていた。彼がエストニアなどのバルト海沿岸で布教使節として活動していたことが知られているから、その都市もバルト海沿岸都市であった可能性は高い。そうであったとしても、キール法典は1263年以降作成されたとされるから、この授与文書が、時期的に見て、キール法典と直接関係しないことは明らかである。それゆえ、この文書はここでの拙訳の対象から外すことにしよう。さらに狭義の条文の後には、「索引 (Register)」、「市参事会選挙規則 (Ratswahlordnung)」、「パン重量規則 (Brotgewichtsordnung)」が、コルレンの利用した写本には収録されていたようであるが、これらの規則等も、同じようにキール法典とは差し当たり関係しないので割愛する。

さて、試訳に入る前に、訳出上の幾つかの問題点を指摘しておかなければならない。第一に、中世低地ドイツ語には「正規」の文法があった訳ではないので<sup>(4)</sup>、ここでの拙訳も全くの試訳の枠を越えるものではないことである。翻訳作業中に、何度となく困難にぶつかり、その度に他の法典類の関連条文の頁を繰らなければならなかったし、そもそも訳者のドイツ語能力からすれば、この時期の史料に完訳を求めることは放棄せざるをえないのかもしれない。

第二に、邦訳に際して、本来の法文の名残をとどめることを意図し、原則として直訳を心掛けた。しかし、そのために文意がかえって曖昧となってしまうたり、あるい

はまわりくどくなりそうな場合には、敢えて意識したり、幾分簡略すぎる訳文になってしまったものもある。

第三に、これと関連して、訳者は、不動産関係の条文については、多少なりとも確信めいたものを持って拙訳を試みることができたが、周知のように、この時期の法典はすべての法領域にわたっており、訳者の貧弱な法知識ではすべてをカバーできず、残念ながら、自信の持てないままに試訳を提示した条文も少なくないということも、お断りしておきたい。

以上の三点からも明らかなように、ここでの邦訳は全く「拙訳」の域を出ていない、と言わざるをえない。しかし、これまで我が国のドイツ都市法史の研究状況を考えるならば、このような拙訳を提示したとしても、読者の御海容を願えるのではないかと思っている。せめて、この拙訳によって、リューベック法の法的な内容に読者が関心を持っていただけるのであれば、これにすぎるものはない。

以下の凡例は、原則としてコルレン本を踏襲している。

- (1) 条文の表題で、条文番号自体が〔 〕で括られているのは、後に条文が削除されたことを示す（例，§ 217）。表題中の〔 〕は、写真版等のために読み取りが困難なもの（例，§ 33），あるいは表題自体が欠落しているもの（例，§ 84）を示す。
- (2) 各条文の表題の後の（ ）は、訳者が付けた条文の内容の短い要約である。なお、条文内の（ ）も、訳者が追加した法文である。ただし、（ ）に原語が残されている場合は、その直前の邦訳が必ずしも直訳ではないことを示す。
- (3) 条文中の〔 〕の法文は、法典作成後に書き加えられた法文（例，§ 49），あるいは削除された個所（例，§ 64）である。
- (4) 条文の後の☆は、訳註あるいは内容と関連する事柄である。
- (5) 条文の作成時期を示す「筆跡（Hand）」番号は、同一筆跡による条文集団の後に挿入した。例，§ 169の後。

## 註

- (1) Gustav Korién, Norddeutsche Stadtrechte II, Das mittelniederdeutsche Stadtrecht von Lübeck nach seinen ältesten Formen, Lund 1951.
- (2) 拙稿「中世末期 リューベックの都市法典における不動産に関する条文につい

て」(『近畿大学法学』, 第37巻, 第1・2号)

- (3) 無論, 文法書や辞典類が存在しないという意味ではない。例えば, 藤代幸一他『中世低地ドイツ語』, 大学書林。

## 2. キール法典

### §1. 第1に婚姻について(婚姻時に約束された財産贈与の請求期間)

ある人が自分の息子あるいは娘を婚姻させ, 財産分割し(sunderet), どのような方法にせよ, 息子のためであれ, 娘のためであれ, 彼らに約束された財産が(婚姻後)最初の2年間に請求されないのであれば, 都市法によれば, その後, 人はこれについていかなる請求権も主張しえない。ただし, 人がそれを恩情(vurntschap)からそのままにしていた場合を除く。(その際)これを人は善良な人々とともに証明すべきである。

☆ この「2年」の期間内に, 「債権者」たる子供が請求しないのであれば, この権利は消滅するのであるから, これは「自然債務(Obligatio naturalis)」ということになる。なお, これと関連する規定が§172(嫁資の約束)にある。

### §2. 訴えについて(婚姻についての訴え)

(都市)法によれば, いかなる男であれ, 女であれ, (その者を)ある者が, 婚姻について, 偽って, あるいは誤って主席司祭(prouste)<sup>(1)</sup>に訴え, 人が訴えた者(=被告)を有罪とすることができないのであれば, 後者は主席司祭によって無罪と判決される。彼を訴えた者(=原告)は, 市に銀10マルクで償うべきである。彼がそれ(=銀10マルク)を有していないのであれば, 彼は, つるし刑(schuppestol)<sup>(2)</sup>を科され, 市から追放されるべきである。しかし, 婚姻について正当な訴えを行い, そして主席司祭によって裁判されることは禁止されてはいない。

☆ ここでは, 婚姻についての教会裁判権が容認されているが, §170では市参事会による裁判権が前提とされている。

- (1) prouste はラテン語では prepositus と表記される。司教座聖堂主席司祭とも訳される。参考, 13世紀に成文化されたゾースト都市法の§2, 林毅他訳「最古のゾースト都市法」(『阪大法学』第136号)。

- (2) 有罪とされた者を, つるし刑台(Wippgalgen)によって河川等へ沈めること。

### §3. 市参事会員について(貴族と関係する者の市参事会からの排除)

以下のことが知られるべきである。即ち、貴族 (heren) に勤務 (ammet) を果たす者は、いかなる者もリュベック市の市参事会員であるべきではないことである。

#### § 4. 婚姻について（夫婦の財産贈与）

ある男とある女が婚姻し、特に嫡出の子供をもうけるならば、夫にせよ、妻にせよ、彼らの財産 (godis) を共同で (to hope)<sup>(1)</sup> 贈与することは許さない。ただし、子供の同意がある場合を除く。その場合には、それは有効とされうる。

☆ 子供の保護が法目的である。

(1) 「共同で」は、その後の法典では脱落するが、1586年の校訂法典 I. 6. § 1 では「互いに (einander)」に書換えられて「復活」している。

#### § 5. 婚姻について（寡夫の先取り特権）

夫を遺して彼の妻が死亡し、その夫が彼の子供たちと財産分割し (schichten) なければならぬのであれば、彼は彼の甲冑 (harnasch) と彼の衣服 (ge schapene kleidere) を先取りすべきである。その他に残余がある場合、彼はそれを彼の子供たちと等分すべきである。

☆ ザクセンシュピーゲル・ラント法は、妻の最近親相続人の相続分について規定する (I. 27. § 1, I. 5. §§ 2, 3, III. 15. § 4, III. 38. § 5, I. 31. § 1) が、寡夫の取り分については規定していない。

#### § 6. 婚姻について（寡婦の先取り特権）

さらに妻を遺して彼女の夫が死亡し、妻が彼女の子供たちと財産分割するのが相応しいのであれば、妻は彼女の宝石箱 (hanttruwe) を先取りする。それが指輪であれ、ブローチであれ。その他にも財産があり、それが衣服 (an schapenen clederen), あるいは家具 (ingedome) であるならば、それを彼女は彼女の子供たちと等分すべきである。

☆ ザクセンシュピーゲル・ラント法 I. 24. § 3 (Gerade について), III. 76. § 1 と内容的に類似している。

#### § 7. 相続財産 (erue) について（妻とともに得た不動産の処分）

いかなる夫も、彼が彼の妻とともに受領した不動産 (torfhact egen)<sup>(1)</sup> を彼の妻の同意なしに、さらに、もし彼らに子供がいるのであれば、彼らの同意もなしに、質入れし、売却し、贈与することは許されない。ただし、彼にやむをえざる事由<sup>(2)</sup>、(即ち) 投獄、飢餓、あるいは人が彼を金額のために裁判において隷属 (= 債務拘束) さ

せようとする場合を除く<sup>(3)</sup>。

☆(1) torfhact egen は、前述のゾースト都市法の§12にも登場する。

(2) 「やむをえざる事由」はザクセンシュピーゲル・ラント法Ⅱ．7．にも規定を見出すが、それらの内容は必ずしも、ここでの内容と同じではない。

(3) 債務拘束については§76。

### § 8. 土盛り (wordinge) について (傾斜地)

以下のことが知られるべきである。即ち、誰かが土盛りしようとして、彼が彼の(下手の) 隣人よりも1フィート (vuot) 高く盛るのであれば、彼は彼の土地に塀 (muren) を築くべきである<sup>(4)</sup>。しかし、上手にある(土地)は上手にとどまるべきである<sup>(5)</sup>。

☆ 雨水の排水の確保に立法意図がある。

(1) 1フィートの盛り土を支え、その流出を防ぐための塀である。

(2) 下手の土地が土盛りによって上手よりも高くなれば、排水に支障をきたすからである。

### § 9. 獲得財産について (処分)

以下のことが知られるべきである。即ち、いかなる者であれ、彼の獲得財産を市参事会員の面前で贈与するのであれば、それは都市法により有効であることである。いかなる条件 (vnderschede) で彼がそれを贈与しても、それは常に有効であるべきである。[いかなる者も、彼の財産を彼の遺言において1度以上に贈与することはできない。]

☆ [ ] 内の文字は、後に欄外に追加された法文である。

### § 10. 婚姻について (後見人の同意のない婦人の婚姻)

いかなる寡婦あるいは少女 (iuncfruwe) にせよ、彼女の血縁者の助言 (rat) なしに、ある者が(彼女を) 妻とするのであれば、彼は、彼女のすべての財産から、彼女の衣服以上のものを取得すべきではない。彼女の財産から、市は銀10マルクを取得し、その他の(財産)は彼女の最近親相続人が取得すべきである。

☆ 後見人の同意のない婚姻に対する罰金については§229も参照。

### § 11. 婚姻について (市外出身の女性)

市外出身で市外に住む婦人あるいは少女が、我々の市民を夫とし、その後その夫が死亡し、彼が死亡するやいなや、彼女が市を退去することを望むのであれば、彼女

は、彼女が婚姻に際して市内に持参した以上の財産を持ち出すべきではない。その他の財産や残った財産は夫の相続人に委ねられるべきである。彼女が、ある都市の男性と婚姻し、その都市へ移り住むことになれば、彼女は彼女の財産を都市法に従って取得すべきである。しかし、ある者が、愚かにもこれ（＝都市法）を破ろうとして、彼の妻に必要以上の（deste mer）財産を与えるのであれば、彼は市に銀100マルクで償うべきである<sup>(1)</sup>。

☆ 市民の財産の農村への流出防止が立法意図であろう。

(1) 銀100マルクは高額すぎるので、実際には、警告的な意味合いしかなかったのではなかろうか。

#### §12. 遺産（erues）の分割について（寡夫（婦）と子供）

妻と夫の間に子供があり、彼らの一方が、それが夫であれ、妻であれ、死亡するのであれば、遺された財産を、人は生存する者（＝配偶者）と家（were）<sup>(1)</sup>に留まる子供の間で財産分割す（schichten）べきである。しかし、子供の1人が死亡するのであれば、彼の持分は、家に留まる他の子供たちに、年長、年少を問わず、均等に相続される。既に財産分割されていた子供の1人が相続人（＝子供）なしに死亡するのであれば、それは再び家（were）の中に戻され、他の子供たちに、即ち、財産分割の終わった子供、家に留まる子供に、それぞれ均等に（vaste）相続される。さらに全部の子供たちが死亡するのであれば、その遺産は最近親相続人に属することになる。

☆ 寡夫の再婚の場合の子供たちとの分割について、§114と§195。

(1) ゲヴェーレについて§102参照。

#### §13. 遺産について（寡夫（婦）と子供）

夫と妻の間に子供があり、彼らの一方が、それが夫であれ、妻であれ、死亡し、子供たちの誰かが成人に達しており、その相続分（erue）を望むのであれば、人は彼に（遺産分割を）拒否することはできない。

☆ 子供が成人になれば、遺産分割を拒否、即ち、延期することはできないことになる。

#### §14. 遺産について（子供のいない寡夫（婦）と配偶者の最近親相続人）

夫を遺して彼の妻が死亡し、彼らに子供がないのであれば、夫は妻の最近親相続人に、彼が妻とともに受預した財産の半分を返還すべきである。同様に、妻を遺して彼女の夫が死亡し、彼らに子供がないのであれば、妻は、彼女が彼女の夫に持参した財

産を、それが存在する場合には、先取りすべきである。その他に財産があれば、それを彼女は、夫の相続人と等分で相続分割すべきである。

☆ 後半の寡婦の相続はザクセンシュピーゲル・ラント法Ⅲ．76．§ 1（子供がいる場合）に類似している。

#### § 15. 遺産について（子供の営業開始）

夫が、彼の妻の死亡後、彼らの子供とともに留まるか、あるいは妻が、彼女の夫の死亡後、そうして（＝留まって）いる間に、子供の1人が彼の営業（*dhing*）を開始し、それについて両方の側（＝剣親と紡錘親）の血縁者が訴えるのであれば、彼らは以下のことを決定（*to rade*）すべきである。即ち、その子供は、彼の相続分を全部（*an eneme stücke*）<sup>(1)</sup>、あるいはその価値に値する金額（*penninge*）を、いかなる異議も受けることなく、受け取ることである。

☆(1) コルレンは「一度に」と理解している。語彙集（*Wörterverzeichnis*）の *stick* の項（226頁）を参照。

#### § 16. 護送（*geleide*）について

市参事会員がある者を、ここ、市内へ護送して到来し、このことが彼を訴えようとする者（＝訴人）に伝えられ、彼がこの護送を侵害（*breket*）するのであれば、彼はこれについて銀10マルクで償うべきであり、各市参事会員に10シリンクで、そして護送されていた者に60シリンクで（償うべき）である。

☆ 護送される者については§ 249. 市外民による護送の禁止は、既に1226年のリューベック市宛の皇帝フリードリッヒ2世の特許状の§ 13にある。「さらに余は固く禁止する。身分の上下、世俗あるいは教会を問わず、いかなる者も、誰かある者を、上記の都市に護送してきてはならない。ただし、その者が自分を訴える者に、それが誰であれ、裁判において（*in iure*）応答すべき場合を除く」。F. Keutgen, *Urkunden zur stätischen Verfassungsgeschichte*, 1901, S. 187. なお、ザクセンシュピーゲル・レーン法76．§ 7 にも護送に関する規定があるが、内容的には関連しない。

#### § 17. アウフラッシングすべき不動産（*erue*）について

ある者が、誰かに1つの不動産を売却するのであれば、彼は、彼に市参事会の面前でアウフラッシング（*vp laten*）し、それを彼に1年と1日の間保証すべきである。しかして、彼がアウフラッシング後4週間以内に逃走するのであれば、その不動産

は、同じ4週間の間、すべての権利 (rechte) とともに、それが売却されなかったのごとくあるべきである。

§ 18. 不動産質について

さらにある者が、彼の不動産を第三者に債務のために質入れするのであれば、彼はそれを彼に市参事会の面前で質入れすべきである。（そうすれば）質入れは有効であり続ける。誰かが、その不動産の質入れされた者を、それが正しい債務ではなく、彼（＝質債務者）が彼（＝質権者）に、別途に利息 (bate) のために（質入れを）行ったと訴えるのであれば、それが質入れされている者は、以下のことを誓約によって保証すべきである。即ち、それが彼（＝質債務者）の正しい債務のために質入れされ、彼は彼に利息のためにそれを行っただのではないことである。

☆ 質についての応答義務は、質債務者ではなく、質権者に課せられている。

§ 19. 遺産 (erue) について（両親は被相続人の異父（母）の兄弟姉妹に優先）  
もし（被相続人の）父と母が生存しているのであれば、彼らは（死亡した子供の）異父（母）の兄弟姉妹に優先して遺産を相続すべきである。

☆ 被相続人の子供は、被相続人の異父（母）の兄弟姉妹に優先する（§ 221）。§ 157も参照。

§ [20]. 相続財産 (erue gode) について

ある者が相続人なく死亡するのであれば、人は彼の財産を市参事会に保管のために委ねるべきである。しかして、その財産を適法に受領する者が、誰も1年と1日の間来ないのであれば、その財産の半分は国王の権力 (der koningliker wolt) に、残りの半分は市に帰属する。

☆ 1188年のリューベック市宛の皇帝フリードリッヒ1世特許状の§ 8「そして、もし誰かある者がそこで死亡し、はからずも相続人を有していなかったのであれば、余は、その者のすべての遺産と家具を1年と1日の間すべて、彼が死亡した家屋で保管すべきことを命じた。ただし、はからずも彼の最近親相続人である者が上記の期間内に現れるのであれば、彼はこれを都市の法に従って獲得すべし。逆に、その期間内に彼（＝被相続人）の最近親相続人の誰も来ないのであれば、彼が相続した物は何であれ、国王の権力に支払われるべきである」。F. Keutgen, a.a.O., S. 184.  
ここでは、最近親相続人が到来しない場合、すべての遺産が国王の権力に帰属するというのである。1年と1日の間の遺産の保管は、ザクセンシュピーゲル・ラント

法 I . 28. にもある。ただし、その遺産は動産とされる。なお、後述の § 161 も参照。

§ 21. 遺産について（寡婦による財産の処分）

夫と妻の間に子供があり、そして子供が嫁資とともに（beradet）婚姻し、（その後）夫が死亡し、妻が彼ら（＝夫婦）が有していた財産とともに留まっている（besit）のであれば、その財産を彼女は相続人の同意なしに売却し、質入れし、贈与することはできない。ただし、彼女がそれを彼女の一期分（liftucht）のために必要とする場合を除く。しかして、それを彼女は誓約しなければならない。さらに、彼女が再婚するか、あるいは修道院に入ろうとするのであれば、彼女は、子供たちと都市法に従って財産分割すべきである。

☆ ザクセンシュピーゲル・ラント法には、財産分割（I . 20. § 3 と § 4）と一期分（I . 32）の規定があるが、ここでの内容とは幾分ずれる。

§ 22. 婦人の保証について（婦人による財産の処分、女商人、夫の約束）

いかなる婦人も彼女の財産を、後見人なしに、売却し、質入れし、贈与することはできない。さらに、いかなる婦人も、後見人なしに、2 と 1/2 プフェニツヒ以上について保証人となることはできない。しかして、商品を有し、購入し、売却する婦人は、彼女が約束するものは何であれ、彼女はそれについて支払うべきである。さらに、夫が、妻を伴わず市参事会員の面前で約束したことは何であれ、その妻は、それに異議を唱えることなく支払うべきである。

§ 23. 後見人について

父が、生存している間に、彼の子供たちのために後見人を指定していたのであれば、後見人が彼の任務を正しく果たしている限り、いかなる者もその後見人を拒否したり、あるいは異議を唱えることはできない。ただし、子供たちが成人するか、あるいは彼らが職人（knechte）である場合を除く。もし彼が後見において彼の務めを正しく果たさず、血縁者がそれを訴え、市参事会が彼（＝後見人）が不正を働いていると見なすのであれば、市参事会員は彼を解任し、第三者を後見人に任命することができる。

☆ 後見人の免責について § 33.

§ 24. 後見人について

いかなる市外民（gast）、あるいはよそ者（vromede man）も、市民の子供の後見

人となることはできない。最近親相続人である者が後見人になるべきである。そして剣親側 (swerdes siden) に由来する者がいるのであれば、その者が（後見人たる）べきである。

☆ 剣親側の後見人についてはザクセンシュピーゲル・ラント法 I . 23. § 1 に詳細な規定がある。

§ 25. 相続財産について（定期裁判集会での相続財産の請求）

相続財産について、人は1年間に3度、定期裁判集会 (echt en dinge) で異義を唱えなければならない。3度目に人は勝訴するか敗訴する。しかして、人がそれ以上頻繁に訴えるか、あるいはこれについて訴えるのであれば、人はそれを60シリンクで償うべきである。

§ 26. 相続財産について（最近親相続人への買取りの提示）

相続財産を有し、それを売却しようとする者は誰であれ、彼はそれを第1に最近親相続人に（買取りの意思の確認のために）提示し、そのために2人あるいは3人の善良な人を伴うべきである。もし彼ら（＝最近親相続人）がそれを購入することを望むのであれば、（それは）第三者が提示するのと同じ（額）においてである。もし彼らがそれを購入することを望まないのであれば、それを（彼は）彼が望む第三者に、都市法に従って危険なく、売却する。

☆ 最近親相続人に買取りの意思を確認せずに売却した場合の、処分者の責任について § 236。

§ 27. 内縁 (vnechte) について

愛人 (amyen) から生まれた者は、いかなる遺産 (erue) も受領しない。しかして、彼の遺産は、そこに属する（＝彼の）最近親相続人 (maghe) が受領する。

§ 28. 相続財産について（特有財産の相続）

ヘルゲヴェーテ (Herewede) とゲラーデ (radhe) を、人は別々に (svnderlike) 譲渡すべきではない。しかして、最近親相続人である者は両方の遺産、ヘルゲヴェーテとゲラーデを受領する。

☆ ヘルゲヴェーテについて、ザクセンシュピーゲル・ラント法の I . 23. § 1, ゲラーデについては I . 24. § 3。ただし、後者の条文では相続については言及されていない。

§ 29. 相続財産について（教会・血縁者への贈与）

ある人 (mensche) が死亡し、そして彼の財産を教会 (godes husen) あるいは彼の血縁者に贈与するのであれば、人は、彼が贈与する物を彼の財産から譲渡すべきである。第1に債務であり、それから喜捨である。その他に財産があれば、それを人は都市法に従って分割すべきである。

§ 30. 相続財産について (不動産の教会への譲渡)

いかなる者も彼の不動産 (torfacht egen) を教会に贈与することはできないし、(それは) 許されるべきではない。ただし、彼が (不動産を) 銀で (=貨幣を代償に) 売却し、それ (=貨幣) を教会に贈与する場合を除く。これを破る者は、それを銀10マルクで償うべきであり、その贈与も有効とされるべきではない。

§ 31. 市参事会員の決定 (kore) (立法権と裁判権及び罰金の帰属)

市参事会員が定めたものに違反する者は誰であれ、彼を市参事会員は裁判すべきである。そこから由来するもの (=罰金) の、1/3 を裁判官が、2/3 を市が取得すべきである<sup>(4)</sup>。しかして、彼らが罰金として (van deme broke) どれだけ徴収するかは、市参事会員が決定する。さらに、市参事会員が、それに違反した者から徴収すると決定したもの (=罰金) から、1/3 を裁判官が、2/3 を市が取得すべきである。

☆ § 127も参照。

- (1) 1188年特許状の § 6 とほぼ同じである。「さらに市のすべての判決、即ち、kore を市参事会員は下すべきである。それによって、彼らが受領する物が何であれ、彼らは2/3 を市に、1/3 を裁判人に引き渡すべきである」。F. Keutgen, a.a.O., S. 184.

§ 32. 判決を非難する者

ある者が、市参事会員が下した判決を非難し、彼 (=前者) がそれ (の不当性) を立証し (vullen komen) えないのであれば、彼は裁判所に4シリンクで、各市参事会員に4シリンクで償うべきである。

☆ 判決非難の資格者については § 118参照。

§ 33. [後見人について] (後見人の免責の宣誓方法)

ある者が、彼の子供たちのために後見人 (vormunde) を指定し、そして父 (=前者) の死後、子供たちが、債務あるいはその他の事柄によって訴えられ、その事案が (後見人に) 知られていなかったのであれば、人は前もって (dar vore) 誓約する (recht don) か、あるいはフォークトの面前で誓約 (sweren) すべきであり、後見

人の1人(en)が誓約を行うべきである。そして、彼らの内の他の者(nen mer)は行う必要はない。さらに、後見人たちは、それについて、彼らの誰が誓約するかを互いに抽選す(loten)べきであり、それ(＝抽選)に当たった者が、単独で誓約をすべきである。

☆ 後見人は複数であることが前提とされている。

#### § 34. 家賃について

誰かある者が、他の者の家屋を賃借し、そして入居し、その後その家屋が焼失するのであれば、それ(＝家屋)を賃借した者は、半年分の賃料の支払いの義務を負う。しかして、彼が入居していなかったのであれば、彼には支払いの義務はない。彼が入居し、半年が経過していたのであれば、彼は1年分を支払わねばならない。しかし、ある者が1軒の家屋に居住し、その家屋の属する者(＝家主)が彼を退去させようとするのであれば、彼<sup>(1)</sup>はその家屋を単独の誓約によって1年間保持することができる。そうすれば、その家屋の属する者は、彼の賃料を1年の間、そこに居住している者に優先して取得することができる。ただし、彼が証人とともに(賃料支払いについて)立証しうる場合を除く。

☆(1) ハッハ第一法典の§ 34によれば、「彼」は賃借人(*qui eam conduxit*)である。

#### § 35. 強盗と窃盗について

ある者が、他の者を強盗あるいは窃盗の科で訴え、(後者が)彼によって逮捕されたのでないのであれば、その者によって訴えられた者は雪冤宣誓を行うことができる。そして彼が望むのであれば、彼は彼(＝原告)を、彼が不当に彼を訴え、彼を侮辱した(*vor achtet*)科で訴えることができる。その際、彼を訴えていた者は、彼に60シリンクで償うべきである。その内、1/3が市に、1/3が裁判官に、1/3が原告に属する。

☆ 雪冤宣誓は、現行犯でなく——次の§ 36も含めると——原告が立証しえない場合に、被告に認められることになる。民事事件での雪冤宣誓の放棄は§ 38。裁判での承認の、雪冤宣誓に対する優先は§ 41と§ 62参照。

#### § 36. 他の者を窃盗犯として訴える(het)者

誰であれ、他の者を、窃盗犯、強盗犯、殺人犯または犯罪人として訴えるか、あるいは市外の荒野に(＝決闘のために)呼び出すなどして、彼を侮辱(*lastere*)し、それが何であれ、彼(＝前者)がそれ(＝後者の犯罪)を立証できないのであれば、

彼はそれを60シリンクで償うべきである。その内、1/3が裁判所に、1/3が市に、1/3が原告に属する。

§ 37. アムト (lude) の手工業者集会 (morgen sprake) について

市参事会は市内にあるアムトに手工業者集会を許したのであるから、彼ら（＝アムト構成員）はそこで市の利益を振興す（べき）であり、そして、それを誠実に行うと親方たち (mestere) も誓約したのである。もし彼らが、これに反して、市の利益にならない別の手工業者集会を開催するのであれば、彼らはそれについて償うべきである。各親方は銀3マルクで（償い）、市内での居住を諦めるべきである。そしてその手工業者集会に立ち会った者は誰でも銀3マルクで償い、手工業者集会（の開催）を諦めるべきである。そして市参事会員は、何を彼らがそこから（罰金として）取得するかを決定することができる。

§ 38. 訴えについて（雪冤宣誓の放棄）

ある者が他の者を、それが何であれ、何らかのために訴え、そして相手方がそれについて裁判において（雪冤）宣誓しようとし（た後）、彼が、誓約する代わりにむしろそれ（＝債務）を返還したいと修正する (wert bericht) ののであれば、彼は裁判所に4シリンクで償うべきである。ただし、フォークトがそれ（＝訴追）を断念する場合を除く。

§ 39. 損害について

ある者が他の者を、彼が彼に損害を与えたと訴えるのであれば、彼はその損害を特定す (benomen) べきであり、訴えられた相手方はその損害を償うべきである。さもなくば、彼はそれについて雪冤宣誓すべきである。

§ 40. 盗品としての木材について

薪 (berneholte) について窃盗犯が訴えられ、そして2人の間でこの物 (sake)（の帰属）が争われ、両者とも、その木材が伐採された木の幹について（自己のものであると）主張する (ten) ののであれば、どちらの者であろうと、相手方を承服させる (verwinnet) の者がその木材を取得する。そして敗訴した者は60シリンクで償うべきである。

§ 41. 裁判について（裁判での承認は雪冤宣誓に優先）

ある者が裁判において承認する (be kennet)<sup>(1)</sup> ことは何であれ、それによって、人は彼を、彼が雪冤宣誓することに優先して、承服させる (verwinnen) ことができ

る。

☆ § 62の前半と同じ内容。

(1) ローマ法的な「認諾 (confessio)」と考えることもできる。

§ 42. 人妻の傍らで逮捕された者について（強姦罪）

ある男が人妻の傍らで逮捕されるのであれば、その者は、その好色漢のゆえに (per Priapum) その婦人によって、市中中の通りを引き回されるべきである。

§ 43. 小舟 (pramen) について（無断利用）

ある者が、他の者の小舟を、彼の知らない間に、利用してトラヴェ河を航行し、その小舟の属する者が、それ（＝利用料）を請求するのであれば、他の者（＝前者）は彼に賃料を支払うべきである。そして彼がそれを訴えるのであれば、彼は彼にそれについて4シリンクで償うべきである。ただし、火災の場合、あるいはやむをえざる事由がある場合を除く。

§ 44. 約束 (louede) について（質の定義）

ある者が、他の者に、彼の財産を当てにして何かを約束し、それが不動産 (erue) であれば、それは質 (weddeschat) である。さらにそれが衣服であれ、何であれ、他の者に指定 (an wiset) されるのであれば、それも質である。しかし、その質の属する者（＝質権者）が、以下のことを許す (stedet) のであれば、それは質ではない。即ち、その財貨 (gut) が、それが彼に指定された場所から移動する (kumt) こと、あるいはそれが現在 (nv) (の状態) から、別の財貨へと変化する (gewandelet) ことである。

§ 45. 粉引き業者が粉引き小屋で持っている升 (matten) について

粉引き小屋には、以下のような大きさの升が置かれるべきである。即ち、その (der) 7と1/2(杯分) が1シェッフェル (schepel) となり (be holden), そして人は4シェッフェルから1升(分) を与えるべきである。

☆ 7.5杯＝1シェッフェル。30杯につき1杯が手数料ということであろうか。後の法典類毎に数字が異なる。

§ 46. 不正な (valscher) 升について

ワイン、蜂蜜あるいはビールのための不正な升を有する者は誰であれ、彼がそれと一緒に取り押さえられる (bevunden) のであれば、彼はそれを60シリンクで償うべきである。そして、彼が何らかの正しい升を持っているにもかかわらず、彼が十分に

計量しない (vore ne dreget) ののであれば、彼はそれを1/2 ポンドで償うべきである。

☆ 次の § 47を含めて、不正な計量計については、さらに § 179を参照。

§ 47. 不正な秤 (wage) について

不正な秤とともに逮捕された者は誰であれ、彼は60シリンクで償うべきである。そして不正な竿秤 (punder) を有する者も60シリンクで償うべきである。

§ 48. 代言人 (vorspraken) について

ある者が、裁判において他の者の言葉を話す（＝代言する）か、あるいは話したのであれば、その事案について、彼は証人となることはできない。

§ 49. 証人について

ある者が、〔2人以上の〕の複数の証人を〔裁判において〕指名し、証人の1部が彼に（出頭を）拒否する (vp gedreuen) のであれば、彼は、彼が指名し、彼に拒否しなかった他の者を享受することができる。彼がそれ（＝指名）を判決によって確保している (beware) 場合には、彼は、彼ら全員を1度に指名すべきである。

§ 50. 偽証について

市参事に、ある者が偽って証言したことが伝えられ、そして市参事会が、それがまさに偽りであると見なすのであれば、偽証（を行った者）は60シリンクで償うべきであり、彼は、その後他の者を2度と証言によって助けるべきではない。

§ 51. 差押えについて

ある者が財産を差押えようとするも (vnde)、彼が裁判役人 (vronen) を発見することができないのであれば、彼はそこに2人の善良な定住民を同行 (neme) すべきである。差押えは、彼が裁判役人をそこに伴うまで有効である。そして、ある者が何か (dingh) を差し押さえようとするのであれば、彼はその財貨 (gut) のある家屋あるいは屋敷地 (houe) に赴き、それを差し押さえるべきである。もし差押え物 (besittinge) がそのままにされる (be steit) のであれば、次の裁判日に彼は裁判所に出頭し、彼の差押え物を訴追す (vervuolgen) べきである。彼がこれをしないのであれば、その差押え物は無効である。ただし、彼が、再度差押える場合を除く。

§ 52. 市参事会員が聴取した約束について

1つの約束が市参事会員、あるいは市参事会員であった者の面前で行われるならば、その約束は有効である。しかして、自分の面前で約束がなされた市参事会員ら

は、市参事会庁舎（hus）に赴き、他の市参事会員に以下のことを告げるべきである。即ち、その約束が行われ、そして、（それは）その際、それ（＝市参事会）に属している（horet）者と、それにかつて属していた者の両名の立会いの下に（mit）行われたことである。その契約は有効であり、いかなる異議も受けることはない。

§ 53. 市参事会員について

貴族に勤務を果たしていた者は、いかなる者も市参事会員であるべきではない。

☆ § 3 とほぼ同じである。

§ 54. 市参事会員の証言

市参事会員らがある行為（saken）に立会い、彼らの1人を除いて、すべて死亡するのであれば、その1人の証言は、その行為について2人の市参事会員が証言するのに匹敵する。人がそれ（＝証言）について彼を信頼し（truwet）ないのであれば、彼は、彼らが（degene）彼とともに立ち会っていたことを誓約すべきである。

§ 55. 麻痺をひきおこした殴打について

ある者が他の者を殴打し、殴り合いによって彼に麻痺が生じ、彼がそれを訴えるのであれば、彼をそのように殴打した者は、彼とフォークトと市に60シリンクで償うべきである。そして、彼は、麻痺している者に、その麻痺について銀10マルクを支払うべきである。しかし、彼が、貧困のゆえにその金額を支払えないのであれば、彼は、その代償として、塔の中で10週間、パンと水を摂るべきである。その後、彼は市から追放されるべきであり、彼は麻痺している者が同意しない限り、再び市に戻ることはできない。

§ 56. 虐待について

我々の市民の誰かが市外で虐待を受け、彼が市に戻って来て、我々の市民の1人を、その（＝虐待）責任が彼にあるとして非難し、彼を訴えるのであれば、その者は彼に償うか、あるいは自分（sin）に責任がないことを雪冤宣誓しなければならない。

§ 57. 判決について（不正な判決発見）

ある者が裁判において不正な判決を発見するのであれば、彼はそれを4シリンクで償うべきである。しかし、彼が、彼がそれを発見し（与え）た者に、彼が当時それ程、熟知していなかったことを誓約するのであれば、彼は容易に（slicht）それから解放され、損失を被ることはない。そして、その判決を発見され（与えられ）た者も解放され、損失を被ることはない。

§ 58. 非難された判決について

さらに1つの判決が、市参事会庁舎での裁判において非難されるのであれば、代言人はそれを市参事会庁舎での、次の裁判集会 (kvmst) の際に提訴す (bringen) べきである。それが彼によって求められる (geuorderet) 場合、当事者 (sakewolde) は彼と一緒にあっても、そうでなくてもよい。(しかし) 彼がそれ (=提訴) をしないのであれば、彼は銀3マルクで償うべきである。

§ 59. 建築について

ある者が、柱 (staken) あるいは建物によって他の者 (=隣人) の土地 (ertrike) を侵害し (bekummeret), そして彼がそれについて裁判に訴えられ、彼が彼 (=隣人) から彼の土地を奪っている (vntrumet) ことになるのであれば、彼は60シリンクで償うべきである。しかし、それ (=侵害部分) が土地の上空であれば、それは4シリンクである。さらに、それがある者 (の土地) へ傾き、そして雨だれが彼の方へ落ち、それについて他の者 (=隣人) が訴えられるのであれば、彼 (=後者) は4シリンクで償い、彼 (=前者) にそのための余地を空ける (vntrumen) べきである。

§ 60. 1軒の家屋を共同で有する人々について

2人の者が1軒の家屋を共同で有するも、そこに一緒に留まることができず、またそのことを望まず、しかし、彼らが、その家屋を売却あるいは取り壊す必要もないのであれば、一方が1年あるいは2年間、彼らが取り決める期間、その家屋に居住すべきである。そして、その後、他方の者が同じ期間 (居住すべき) である。

§ 61. 不動産 (erve) について (不動産の共有の解消)

人々が共同で不動産を有し、彼らが互いに協力せず、どちらの者であれ、他の者から離れることを望むのであれば、その者はその不動産を貨幣 (penninge) で評価し、その不動産での彼の居住仲間 (kumpane) である者 (=他の者) に (以下のことを) 選択 (kesen) させるべきである。即ち、彼らはその不動産、あるいはその貨幣を取得することである。しかし、選択する者は8日以内に選択すべきであり、その貨幣を人は4週間以内に支払うべきである。人々が船舶を共同で有する場合も同様である。

§ 62. 開催される裁判集会 (dinge) について

ある者が開催された裁判集会で承認したことは何であれ、それによって人は彼を、彼が雪冤宣誓しうることに優先して (bat), 承服させることができる。もしそれをフ

ォークトが認め（bekant）、市内に不動産を有している２人の善良な人々がそれを誓約するのであれば、である。

☆ 裁判での承認と雪冤宣誓の関係について、§ 35の☆を参照。

§ 63. 傷害と故殺について

傷害あるいは故殺が訴えられるのであれば、死者（＝被害者）の後見人が和解（sic euenen）することは許されない。ただし、フォークトと市の同意がある場合、（あるいは）後見人が訴えた前者が、無罪と判決された場合を除く。その後、彼<sup>u</sup>は、彼らの間に何らかの怨恨（wranc）が存在するのであれば、和解することができる。

☆ ここでは故殺のみが規定され、傷害については規定されていない。

(1) ハッハ第三法典の§ 112によれば、彼は「後見人」である。

§ 64. ２人の婦人を妻とする者（重婚罪）

ある者がここで１人の婦人を妻とするも、彼が別の場所でもう１人の妻を有し、その彼女を遺棄していたのであれば、彼は有罪とされ、彼はこれを〔彼の彼の生命をかけて償うべきである。そして彼女は先取り分（vordele）として、彼女が彼に持参したすべての財産を取得すべきである。さらに彼女は、夫の財産の半分を取得すべきである。同様に、その法（recht）は、２人の夫（との重婚）の科で有罪とされた婦人にも下されるべきである。〕

☆ [ ] は1350年頃に削除された個所。G. Korlén, a.a.O., S. 19.

§ 65. 建築について（壁を接する家屋の改築）

２人の者が２軒の家屋を１つの壁をはさんで建築し、そして彼らの１人が彼の家屋を取壊し、改築しようとするのであれば、２軒の家屋が接している壁はそのまま残されるべきである。最初に改築する者が、彼の家屋をできる限り接近して設置すべきである。それから人は古い壁を取壊し、その木材を等分し、そ（＝壁）の場所は空間にして（ledig vnde vmbekummeret）おくべきである。

§ 66. 建築について（物差しと測量なわ）

ある者が彼の建物を取壊し、適法に（echt）再建しようと望むのであれば、彼は市参事会員から物差し（mate）と測量なわ（snor）を受領すべきである。それを彼は通りに置き、それから建築すべきである。彼がそれを行わず、人がこれについて彼を訴えるのであれば、彼は市に銀３マルクで償い、そして市の指示に従って建築すべきである。

§ 67. ある者の建築によって負傷した者

ある者が彼の土地 (egenen) の上に建築し、そして偶然 (vnGeschichte) に事故、即ち、その建物によって負傷者が生じることがあっても、その建物の属する者は、それについて負傷者に責任を負う必要はない。しかし彼は、それが彼の意思にかかわりなく生じたことを誓約しなければならない。

§ 68. 建築について

我々の市民の誰かが1つの(家)壁を有し、そして、その雨だれが外側へ落下している場合に、彼の隣人が建築しようとして、彼の壁の半面 (half) 利用しよう (af gewinnen) としても、他方(=壁の所有者)がこれを許そうとせず、彼(=隣人)がこれを果たせないのであれば、市参事会員は、できる限り両者の間でそれを調停すべきである。しかして、その壁を利用する者は、上の方まで石造りの家屋を、(しかも) 前面と背面を切妻として1年以内に建築すべきである。さもなくば銀20マルク(の罰金を科せられることになる)。

☆ 罰金額は、建築に関する罰金としてはかなり高額である。

§ 69. 他の者(の上手)に建築する者

ある者が土地の下手に建築し、そして他の者がその上手に建築し、彼の建築物が彼の隣人に余りに近く重なり (vp), そして、下手の土地 (stat) を彼の建築物で占めている (bekummeret) 者が、それ(=土地)を誓約によってあえて確保しようとするのであれば、あるいはそれを望むのであれば、彼に余りに接近して建築した他(=上手)の者は、その重なった (dar bouene) 土地を空間とす (vnt kummeren) べきである。そうすれば彼、即ち、下手の土地を確保した者は、その後、その上に彼が望む時に建築することができる。

☆ リューベック市は島状の地形からなり、敷地は総体的に傾斜地であるから、土地の有効利用のために、上手と下手の土地の境界確定と、建築の際の隣人間での空間設置が必要とされたのであろう。

§ 70. 犬によって負傷させられた者

何らかの事由 (sake) で、ある者が他の者の家屋に赴き、彼が1匹の犬あるいは1頭の家畜によって負傷させられても、(そして) どのようにして彼が負傷したのであれ、その家主はそれについて負傷者に責任を負う必要はない。

§ 71. 1頭の家畜が路上で傷を負わせた者

ある人 (menschen) の家畜が路上を歩き、家屋の外で他の人に傷を負わせ、家畜の飼い主が（その責任を）拒否し (vorsaket), 彼がそれ（＝家畜）を引き取らないのであれば、その負傷について彼は責任を負う必要も、雪冤宣誓する必要もない。〔しかし負傷者は罰金の 2/3 を、そしてフォークトと市参事会は 1/3 ずつを取得する。〕

☆ § 152 も参照。

#### § 72. 夜間通行人 (nacht gengeren) について

夜間、路上を歩いていた者が、他の者によって拘束され、彼が、彼を拘束した者に、おそらく (licht) 財貨 (gut) 与え、そして彼（＝被拘束者）が市参事会と裁判官に引き渡されず、人がこれを立証しうるならば、彼を拘束し、彼から財貨を巻き上げた者は、故意 (vorsate) と呼ばれることについて責任ありとされ、それを銀 10 マルクと 1 フーダー・ワインで償うべきである。

☆ 故意について、W. Ebel, Forschungen zur Geschichte des lübischen Rechts, 1. Teil, 1950, S. 30-37. 他に § 212, § 222, § 224 参照。

#### § 73. 差押えについて

ある者が、債務のために逃走した他の者の財産を差押えようとするのであれば、（差し押さえを行った者の）最後の者は最初の者と同じように、2 番目の者も 3 番目の者と同じように、差押えを享受すべきである。

☆ 原則として債権者の間に優先順位は無い。ただし、市外での差押えについて § 99 参照。

#### § 74. 証言について（証人資格）

1 つの事柄について、それが真実であると証言すべき者は、市内に自分の (er) 不動産 (torfacht egen) を有すべきである。そうであれば、彼はそれを証言することができる。

#### § 75. 打撲傷と負傷について。そして証言について

神の平和と呼ばれる平和（の期間）であれば (Een), 打撲傷と負傷 (bla vn de blode) について誰でも、彼が悪評のない (vmberopen) 者である限り、証言することができる (mot)。ただし、ヴェンド人 (wenede) と浮浪民 (vriheyt) は除く。しかし、人は 1 つの打撲傷について 1 人以上の複数人を訴える (geuen) ことはできない。1 つの負傷についても同様である。ただし、人がそれを自白する (kenne) 場合を除く。

☆ 「神の平和」が援用されている。

§ 76. 隷属の下に置かれる者（債務拘束）

ある者が、他の者の隷属下に置かれるのであれば、人は彼に奉公人（gesinde）と同じように食事を与え養うべきである。彼は、彼を確実に監視し、そして彼（＝主人）が望むのであれば、彼を鎖につなぐべきである。ただし、彼が彼を破滅させる場合を除く。しかして、彼は彼の主人の仕事を果たすべきである。もし彼がその拘束（haltnisse）から逃走しても、市の裁判所は彼を拘留すべきではない。彼は常に自由である。あるいは人は、彼が自ら解放できるよう、彼を行かせるべきであり、彼はそれを行うことができる。彼がさらに誰かによって拘束されても、彼が彼自身の財産を有しているのであれば、その財産によって、いかなる異議も受けることなく、彼は彼が隷属下にあった者から自らを解放する。

§ 77. 死亡について（後見人の市参事会による任命）

ある者が死亡し、彼が彼の子供たちと彼の妻にいかなる後見人も指名していず、彼にいかなる血縁者もないのであれば、いかなる者も後見職を、市参事会員の許可なく、自己のものとすることはできない。なぜならこれは市に属するからである。

§ 78. 売買について（追奪担保責任）

ある者が他の者に、いかなる財貨（gut）であれ、財貨を売却するのであれば、彼は相手方に保証するか、あるいは彼は相手方の意向（minnen）に従うべきである。

§ 79. 売却について（使用人による売却）

1人の雇われている（medet）奉公人が彼の主人の財貨を売却し、その主人が売買を承認しないのであれば、その奉公人は、彼が買主に保証できないことを誓約しなければならない。そうすれば彼はその責任を免れることになる。

§ 80. 喜捨料（hiligen geystes penningen）について（手付け）

ある者が他の者に、1つの売買、あるいは1つの約束について、喜捨料を与えるならば、彼が手付け（litkop）を与えたのと同様に、それは有効である。ただし、彼らが完全に別れる（＝解除する）前に、彼が彼にその金額（penning）を返還するか、あるいは相手方が彼に返却を求める場合を除く。

§ 81. 自分の橋を修理しない（ne maket）者

ある者が、崩壊し、解体した彼の橋を修理せず、それが彼の家屋の前（bi）にあって、その家屋に帰属し、それによって彼の隣人の、あるいは彼の同市民の、家畜が事

故に遇い、骨折するのであれば、彼は、その家畜について彼の隣人あるいは彼の同市民に賠償すべきである。

§ 82. 馬について（馬の借主の責任）

ある者が1頭の馬を賃借し、その馬が、何によってであれ、傷ついたとしても、それ（＝馬）を賃借した者は、それについて償う必要はない。ただし、それが彼から盗まれるか、あるいは奪われた場合、あるいは、その脚を橋で骨折し、それが（彼の）不注意から生じた場合を除く。

☆ おそらく不注意による損傷の場合の、加害者の責任については§ 125参照。

§ 83. 和解 (evenigge) について

人は、いかなる事件 (sake) も、もし裁判官、市、当事者が同じ様に承認し (behave) ないのであれば、和解させることはできない。

§ 84. 〔刀剣について〕

他の者に1本の刀剣を貸し与えた者が誰であれ、それが彼に返還されないのであれば、それが高額あるいは低額で評価さ (rekenet) れようとも、人はそれを3 シリンクで償うべきである。

§ 85. 船舶裁判での証人について

ある者が、債務を請求するために、あるいは何か他の事案のために、1隻の船に乗船し、船長そしてその船にいる人々 (luden)<sup>(1)</sup> の面前で訴えを提起し、船長が人々とともに船法 (schepes rechte) に従って、債務あるいはその他の事案について原告に対して開廷するのであれば (richtet)、この債務あるいはこの事案を請求する者は、誰か証人を別に提示する義務はない。しかし彼は、彼が船内で見出しうる最良の者の証言を享受すべきである。市領域 (landes) 外で証人を提示する場合も、（これと）同様である。

☆(1) 人々は、ここでは船員と解してもよいであろう。参考§ 89。ただし、§ 37（アムト）。

§ 86. 相続財産の保証について

相続財産について保証を義務づけられる者は、1年と1日の間、その不動産にいかなる異議もなかったことの保証に立つべきである。その（期間）後、その不動産を購入した者は、それを誓約によって取得することになる。ただし、それを訴える (andingen) か、あるいは請求する者が市領域外にいる場合を除く。

§ 87. 不動産 (erue) について

ある者が不動産を売却し、それについて1年と1日の間保証すべく、保証人を立てるのであれば、その保証人は、保証に関わる (boret) すべてのことを保証すべきである。ただし、土地の境界 (schede) はこれに含まれない。もし人がこれについて訴え、その不動産を売却した者を見出しうるならば、その者が保証すべきである。彼が見つからない場合には、保証人がこれについて責任を負い、そして保証すべきである。

☆ 動産売買の際の保証について § 103。

§ 88. 保証について

保証人を立てることを申し出る (sic verromet) 者は誰であれ、彼は彼の名前を挙げるべきである。彼が市領域内に居住しているのであれば、彼は彼を14夜内に立てるべきである。彼が市領域外にいたのであれば、6週間以内である。彼が海のかなた (ouer) にいたのであれば、1年と1日以内である。

§ 89. 海難において財貨を投棄する者 (海損)

人々が海難にあって彼らの財貨を投棄するのであれば、その財貨について、その船と、その財貨を船内で有していた人々が持分に应じて賠償すべきである。その後 (nademe alse) 各人は、その財貨について、彼らが目指していた港において賠償することもできる。

☆ 海難に関する条文は、他に § 107 (=133) と § 230。

§ 90. 市の公務を果たしている市参事会員に暴行を加えた (mishandelt) 者

市の公務を果たしている市参事会の者が、彼の責任ではないにもかかわらず、言葉と行為によって暴行を受け、人がそれを証明しうるのであれば、彼 (=加害者) は彼に60シリンクで、市には銀3マルクで、各市参事会員には10シリンクで償うべきである。

☆ 物理的な虐待については § 228。

§ 91. 市場の平和について

他の者に市場で、殴打あるいは一撃あるいは同様の方法で暴行を加えた者は、その違法行為 (broke) に应じて彼に償い、その後市参事会に銀3マルクで償うべきである。そして市参事会員がそこから取得するつもりであるもの (=金額) の内、2/3 が市に、1/3 が裁判所に帰属する。

§ 92. 自殺する者（自殺者、処刑された者の遺産）

ある者が自殺するか、あるいは判決によって斬首刑または絞首刑に処せられるのであれば、彼の相続人が彼の財産（gut）をすべて受領する。

§ 93. 違法行為（broke）について

罵りあるいはその他の違法行為のために、市参事会員によって市から追放された者を、それが平和喪失刑（vredelos）でない限り、市参事会員は、彼らが望むのであれば、彼を市内に戻すことができる。たとえ裁判官（の同意）がなくとも、彼らが望むのであれば、である。

§ 94. 子供について

12才以下の子供たちが互いに傷つけあっても、裁判所はそれにかかわることはない。しかしその両親たちは、公衆の面前で（witlike）違法行為について（子供たちを）鞭によって懲罰すべきである。

☆ 成熟年としての12歳と、成人としての18歳について § 115参照。

§ 95. 窃盗犯から財貨を奪い取る（af iaget）者

我々の市民が1人の窃盗犯から彼の財貨を奪い取り、それが窃盗犯の物であっても、その財貨を奪い取った者は1/3を、裁判官は1/3を、そして市は1/3を取得する。しかして、彼（＝窃盗犯）から盗品が奪い取られ、それが我々の市民の物であれば、その者（＝市民）にすべて返還されるべきである。それが市外民（gast）の物であれば、フォークトが1/3を取得し、それを盗まれた者が2/3を取得すべきである。

☆ 市民の法的な特権の一つと考えてよいであろう。ただし、§ 124も参照。

§ 96. 地代について（地代の支払いとその遅滞）

ある者が1つの土地を借地権（wicheide rechte）によって有し、彼が彼の地代を復活祭の後14夜内に、あるいは聖ミハエル祭（9月29日）の後14夜内に支払わず、その地代の属する者がそれを（裁判で）請求しようとするのであれば、その土地に居る者は、裁判官に4シリンクで償い、2倍額の地代を支払うべきである。もし彼が、その土地の属する者に最初にそれ（＝借地上の建物の買取り）を求め（bedet）ないのであれば、彼はその建物を売却することはできない。

§ 97. 殺殺について（故殺）

我々の市民の1人が他の者を殺殺し、彼がそのために逃走し、我々の都市法に従って平和喪失刑に処せられるのであれば、裁判所にある彼のすべての財貨、不動産

(erue),そして商品の、半分を彼の最近親相続人が取得し、残りの半分を人は3つに分割すべきである。その内の1/3を市が、1/3を裁判所が、1/3を相手方(sakewolde)が取得すべきである。

#### § 98. 船を賃借する者

ある者が1隻の船を一定期間賃借するのであれば、彼はそれを誰かに質入れ、売却することはできず、それはそのまま(stede)にされ、さらに(彼は)それによっていかなることもしてはならない。ただし、彼は、彼の望む者に、そ(＝賃借)の期間、それを賃貸することはできる。

#### § 99. 逃走について

我々の市民の1人が彼の債務のために逃走し、そして彼の財貨が市外で、あるいは遮断棒(bome)<sup>(1)</sup>の外で発見されるのであれば、その財貨を捕捉して持ち帰った者が、彼の債務(＝請求額)を前もって受領すべきである。その他(の財貨)は、彼の債権者らが、もし彼らがそれを差し押さえるのであれば、持分に応じて取得すべきである。

☆(1) 例, Brandenbaum (市領域の東端にある、市濠に面した場所)。ここには、街道を閉鎖するための遮断棒が設置されていた。G. Fink, Lübecks Stadtgebiet, in Städtewesen und Bürgertum als geschichtliche Kräfte, Gedächtnisschrift für Fritz Rörig, Lübeck 1953, S. 255.

#### § 100. 開催される裁判集会について

ある者が裁判集会に出席し、他の者を訴え、それが彼の生命(hals)にかかわり、そして彼(＝被告)が1人の代言人を懇願し、そしてその代言人には1人の補助者(helpe)が付けられるのであれば、彼(＝被告)が援助を懇願する者は誰であれ、その者がその場に居るのであれば、彼は彼を援助すべきである。そして、その者(＝代言人)から彼は免れる(erweren)ことはできない。

☆ 自ら懇願した代言人の言動は、その懇願者を拘束するということであろう。

#### § 101. 死亡について(未婚と子供がいない場合の相続)

夫(man)あるいは妻(wif)<sup>(1)</sup>が、あるいはどちらにせよ、死亡するのであれば、両方(の親族)の相続人は(遺産を)同等に取得する。相続人が同数であれば、彼らは均等に取得する。しかして、一方の相続人が他方の相続人よりも多いのであれば、我々の都市法に従って、彼らは頭数に応じて取得する。

☆(1) 未婚の「男あるいは女」と理解することも不可能ではない。

§ 102. 破れた衣服を売却した者と、その損害について

ある者 (man) が他の者に衣服を売却し、それが彼のゲヴェーレ (were)<sup>(1)</sup> に到来するや否や、他方が、それが破れていたと彼を訴え、相手方 (de andere)<sup>(2)</sup> が、自分 (he) はそれを知らなかったとあえて (dar) 雪冤宣誓を行うのであれば、彼は、彼 (=買主) にいかなる損失についても責任を負う必要はない。

☆(1) コルレンは、これに Besitz, Haus und Hof という訳語をつけている。G. Korlén, aa.O., S. 234. § 12, § 171~173, § 235も参照。

(2) 「相手方」は、校訂法典のⅢ. 6. § 11によれば売主 (Vorkeufer) である。

§ 103. 保証と損害について (債務保証の範囲)

ある者が、他の者のために財貨 (gut) について保証人となるのであれば、彼は彼に代わって債務を支払うべきである。第三者 (de andere) が、彼を損害について訴えようとするのであれば、彼はそれについて責任を負う必要はなく、保証人を立てた者が [責任を負うべきである。]

§ 104. 塀 (mvren) について (塀の設置と隣人の負担)

2人の者が一致して (to samene boret) 1つの塀を築こうとするのであれば、1方の者は他方の者を60フィート (voten) (の長さ) まで援助しなければならない。しかして1方 (の土地) が他方よりも低い位置にあるのであれば、人は低い方の土地から20フィート (の高さまで) 積み上げるべきである。その際、他方の者が、より高くあるいはより長く積もうとするのであれば、彼は自らの費用で両側の塀を単独で積み上げるべきである。しかして、その後、他方 (=彼の隣人) もその塀を享受し、かつ必要とするのであれば、彼は彼に、彼 (=建築主) が前もって単独で支出した費用の半額を、支払う (weder geuen) べきである。

☆ § 150も参照。

§ 105. 贈与について (市参事会員の収賄)

以下のことが知られるべきである。即ち、いかなる市参事会員も、市または裁判所に関わる事案について贈与を受けるべきではないことである。このことを各市参事会員は、彼が市参事会員をやめる際に、誓約によって証明すべきである。そして旧市参事会員も、彼らが再び市参事会に復帰する場合には、同様に、彼らがこの自治制定法 (wilkore) を遵守していたことを宣誓すべきである。彼らのいかなる者も1シュテュ

ープヒェン (stouiken) 以上のワインを受け取ることは許されない。

☆ シュテューブヒェン (Sti ibhen) = 約4リットル。

§ 106. 都市法を破る者 (反逆罪)

ある者が集会し、血縁者とともに、市参事会員と市が有する法 (recht) に違反し、これを破ろうとして (begonde), 彼がそれについて有罪とされるのであれば、彼は100マルク・プフェニッヒで償い、市から追放されるべきである。彼がその金額を有していないのであれば、人は彼を塔に幽閉し、彼が100マルクを支払うまで、そこで水とパンを摂らせるべきである。そして彼は市から追放され、その100マルクの内、2/3は市に、1/3は裁判所に帰属すべきである。

§ 107. 船舶について (海損)

ある者が彼の船を人々に賃貸し、その船がその人々の意思により出帆し (schepende), もしその船が航海中に破損するのであれば、用船者ら (vrucht lude) は彼に積荷 (vrucht) の半分を返還すべきである。

☆ § 133とほぼ同じ。

§ 108. 税 (schote) について (納税義務)

以下のことが知られるべきである。即ち、リューベックの各市民は、彼と彼の妻と彼の子供たちの財産について、そして彼が後見によって自ら所持している財産について、税を支払うべきである。その財産が市内にあるか、あるいは市外にあるか、あるいは彼がそれを諸侯 (vorsten) または領主 (heren) からレーン (lene) として受領しているか、あるいは彼がそれを別の方法で有しているか、にかかわらずである。さらに彼がそれによって領主に勤務を果たしていても、彼は、彼の他の財産と同様に、それについて市に納税し (scheten) なければならない。

☆ 納税義務違反については § 117 参照。

§ 109. 質について (非市民との質)

ある市外民 (gast) が市民に質入れし、あるいは市民が市外民に質入れするのであれば、人は、質について裁判において一様に訴訟手続きすべきである。

☆ 質自体が禁止されている訳ではないが、ブロッケス第二法典 § 250 と校訂法典 III. 4. § 7 では「3週間以内」に限定されている。

§ 110. 鋭い刀剣について (傷害未遂)

ある者が、彼の剣あるいは彼の短剣を抜いて、誰かを傷つけようとするのであれ

ば、たとえ彼が誰も傷つけなくとも、彼はそれについて市に特に銀3マルクで、裁判官に60シリンクで償うべきである。その内、原告に1/3が、裁判官に1/3が、そして市に1/3が帰属する。もし人がそれを定住の人々とともに立証しうるのであれば、である。

☆ § 204と§ 213も参照。

§ 111. 都市法 (wic[bel]deme re[chte]) について (妥当領域)

我々が我々の都市で有するこの法を、我々は、我々の都市領域 (wi dhelde) が広がり、かつ到達する範囲内で有する。

§ 112. 判決について (判決非難)

我々の法が妥当している小都市 (steden) あるいは都市領域 (wibelden) において、1つの判決がある者に発見され、もし彼がそれを非難するのであれば、人はそれを (当該地の) 市参事会に差し向けることになる (weist)。しかして、それ (=同じ判決) がその市参事会によって発見され、それが彼には正しいとは思わないのであれば、彼は、それをさらに我々の市参事会の面前で非難することができる。

☆ 当該地の裁判所⇒その地の市参事会⇒リューベック市参事会の順序であり、上訴制に近い。

§ 113. 訴えについて (フォークトの起訴強制の禁止)

フォークト (voget) は、いかなる者にも違法行為 (broke) についての提訴を強制してはならない。ただし、彼あるいは裁判役人 (vronen) に訴えがなされ、そして彼がその場に到来し、そこで叫び声があげられた場合を除く<sup>(1)</sup>。

☆ § 169参照。

(1) 叫喚告知については、ザクセンシュピーゲル・ラント法 I. 2. § 4. この限りで農村法的な訴訟手続きを踏襲している。

§ 114. 死亡について (寡夫 (婦) の再婚と子供のための清算義務)

夫を遺して彼の妻が死亡し、彼らに子供があり、そして彼が他の婦人を娶るのであれば、彼は、彼の子供の血縁者に対して清算 (rekeninge) を行うべきである。彼がこれを行う意思がなく、人が彼にこれを適法に (mit rechte) 裁判官の面前で強制するのであれば、彼はそれから解放 (ouer wesen) されることはない。ただし、彼が清算する場合を除く。しかして、子供たちが市外民 (vromede) であり、それゆえ彼らに、それを請求しうる血縁者を有していないのであれば、市参事会は、人が彼らに

対して清算を行うことを決定しうる (boret)。彼ら (＝市参事会員) は、それから、子供たちが彼らの財産を受領することを決定 (vogen) すべきである。妻を遺して夫が死亡する場合も同様である。

☆ 子供が市外民であれば、原則として相続権は否定されていたのであろうか。

他に、§ 12, § 195参照。

#### § 115. 成人した者 (男女の成人年齢)

1人の若者 (knecht) が18才になれば、彼は成人である<sup>(1)</sup>。そして1人の少女 (iuncvrowe) が12才になれば、彼女は成熟年 (to eren iaren) に達する。しかし彼女は、彼女の後見人なしには、成人とはなりえない (wert)。

☆(1) ザクセンシュピーゲル・ラント法 I. 42. § 1によれば、成年は21歳から始まる。

#### § 116. 不動産について (アウフラッシング)

売却された不動産をアウフラッシング (vp laten) するか、あるいは不動産を質入れしようとする者は、両方 (の法行為) とも開会中の市参事会の面前で行うべきである。そうすれば、それは有効となる。

#### § 117. 税 (schote) について

人がある者を、彼が完全に税を納めていないと訴えても、彼が非難の余地のない (vnbesproken) 人物であれば、彼は宣誓によって雪冤することができる。しかし、人が彼を、彼が完全に税を納めていないと訴え、彼がそれを承認するのであれば、彼はそこで問題となった (af kumt) ものを償うべきである。その内、市には2/3が、裁判官に1/3が帰属する。

☆ 「非難の余地のない人物」の特権的な地位。納税義務については§ 108参照。

#### § 118. 判決について (市参事会員の判決に対する非難)

市参事会員が下した判決を、いかなる者も非難することは許されない。ただし、原告 (sakewolde) と訴えられた者 (＝被告) を除く。

☆ § 32も参照。

#### § 119. 質について (質物の盗品としての訴え)

ある者がビール、あるいは食べ物 (berade spise) について質権を有し、その後、他の者が到来して、それが彼から盗まれるか、あるいは奪われた物であると主張するのであれば、そのように主張する者は、彼の誓約によって、それを保持している者に

優先して、それを取得することができる。しかし彼（＝後者）が、盗品あるいは略奪品として訴えられていない質物を持っているのであれば、彼は、彼の下に有しているその質物を、彼の誓約によって取得する。そして彼が誓約によって取得しうる限りのもの（vele）を、彼は所有す（hebben）べきである。ただし、それが善良な人々の面前で質入れされていたのであれば、彼は、彼らが証明しうる限りのものを所有すべきである。

☆ 食べ物の質の期間については§ 158参照。

§ 120. 市の不動産（stades gvde）について

ある者が、市の内外にある、市に属する不動産（torfachtech egenes）を占拠する（sic vnderwint）のであれば、それを市参事会員は裁判官の面前で訴え、裁判官はこれを裁判すべきである。

☆ 1188年特許状の§ 13「さらに余は特別の贈与により、彼らに以下のことを確証する。即ち、いかなる者も、身分の上下を問わず、上述の都市の内外、その境界内で、建物あるいは城砦によって（土地を）先占してはならない。しかし、もしある者が、その市領域を、いかなる方法にせよ、陸上あるいは水上において塞ぐのであれば、彼らは余の權威によって罰金（freti）とともにその市領域を取戻し、解放すべし。さらに、市の地域を建物の占有によって占拠した者は、60ソリドゥスで償うべし」。F. Keutgen. a.a.O., S. 185.

§ 121. 貨幣製造人（mvntere）について（不正鑄貨）

ある者が貨幣製造人を、彼が彼に不正な貨幣を与えた科で訴えても、彼（＝前者）が、善良な人々の立会いの下に、それを鑄造人の台（brede）で、あるいは彼の場所で見つけなかったのであれば、その鑄造人は雪冤宣誓を行い、彼は解放されることになる。

☆ 1188年特許状の§ 12「さらに市参事会員は、余の贈与により、以下の特権を有すべきである。即ち、彼らは毎年、彼らが欲する時に、貨幣を検査すべし。そして、もし貨幣製造人が違反していたのであれば、彼は償うべきである。その償いから生じるものは何であれ、その半分は市民に、残りは国王の権力に帰属すべし」。F. Keutgen, a.a.O.. S. 185.

§ 122. 人妻について（姦通罪）

フォークトは、いかなる者も1人の人妻とともに捕らえるべきではない。しかし

て、彼女の (des wiues) 夫、あるいは彼の血縁者、あるいは彼女の血縁者がこれを行う (＝捕らえる) べきである。このような事態が生じるならば、フォークトはそこに赴き、彼らを拘束し、都市法に従って裁判すべきである。

§ 123. 争いについて (市参事会員の仲裁)

2人の誠実な人が互いに争い、あるいは仲違いするならば、市参事会員らは彼らの面前に彼らを出頭させ、彼ら両者に、(違反の際の) 生命刑と金50マルク (の罰金の警告)<sup>(1)</sup> によって、平和を遵守すべきことを命じ、さらに、彼らが彼らの血縁者とともに出頭し、彼らの助言に従って和解すべきことを命じるべきである。これがなされないのであれば、市参事会員がこれ (＝強制仲裁) を引受け、そして彼ら (＝当事者) の1人が他の者を傷つけていたならば、前者 (enen) に他方の者への償いをさせるべきである。しかして1人の市参事会員がその場に赴いた際に、2人あるいはそれ以上の者が争っているのであれば、その市参事会員は単独で平和を命じることができる。さもなくば銀10マルクの罰が下される。それは必要なだけ命じられる。

☆(1)「誠実な人」は裕福な市民であり、それだけに彼らの争いが影響力を持つからであろうか、その罰金は金貨によるマルクであり、かなりの高額である。

§ 124. 盗品について (自力による取戻し)

盗品をいかなる者もフォークトの許可なしに取り戻すことはできない。さもなくば、彼は60シリンクで償わなければならない。

☆ 盗品の取戻しについて § 95参照。

§ 125. 家畜の損傷について

ある者が、他の者の1頭の馬あるいは牛、あるいは何であれ、それに損傷を与え、彼が望むのであれば、彼は相手方 (＝所有者) に賠償することができる。フォークトはそれについて (訴追手続きを) 始めることはない。しかして、それがフォークトに訴えられるか、あるいは裁判役人 (vrone) がそこに到来するのであれば、フォークトは、彼らが和解するための許可を与えなければならない。

☆ 事故による家畜の損傷について § 82参照。

§ 126. 盗まれた馬について

ある者が1頭の馬を我々の都市で見かけ、彼が以下のことを主張する。それが彼から盗まれた馬であり、それが彼から盗まれて以後、彼はそれを見かけた場所へ来なかったこと、そして、彼は以下のことの完全な証拠を持っていることである。即ち、そ

れが彼の家畜小屋で生死を共にし (leuendi ch vnde dot), そこで飼料を与えられていたことである。これに対して (Vnde), 相手方は、彼がそれを購入した者についての善良な保証人を有していると主張し、その保証人を出頭させ、そして、その保証人が、彼も善良な保証人を有していると主張し、さらに2人目 (andere) の保証人が出頭し、彼も善良な保証人を有していると主張する。そして最後に3人目の保証人が出頭し、彼は（以下のことについて）完全な証明書 (orcunt) を有していると主張する。即ち、その馬は彼の 家畜小屋で 飼料を与えられ、生死を共にしていたことである。もしこのようなことが行われるのであれば、その馬を彼の支配 (wolt) 下に置いている者は、訴えによってそれを獲得する者に優先して、それ（一馬）を確保することができる。

#### § 127. 自治制定法 (wilkore) について（市参事会員の立法権と裁判権）

市参事会員が制定する、すべての自治制定法（に関する事件）を市参事会員は裁判することができるし、またそうすべきである。そして、彼らがそこから取得するものの内、フォークトは1/3を取得すべきである。

☆ § 31を参照。

#### § 128. 市参事会員について

父と息子、または (vnde) 2人の兄弟が（両者同時に）市参事会員であることは許されない。しかし（彼らの）1人が死亡するか、市参事会を引退するのであれば、人はもう1人の者を、彼が相応しい人物であれば、市参事会に受け入れることができる。

☆ § 135も参照。

#### § 129. 誤った領得 (misgrepe) について

（財産の）誤った領得が行われ、それを行った者が、平和的に返還することを望むのであれば、それを彼は行うことができる。ただし、彼がいかなる違法行為も行っていない場合である。しかし彼がそれを返還しようとせず、裁判において裁判官によって強制されるのであれば、彼は60シリンクで償わなければならない、その内の1/3が裁判官に、1/3が市に、そして1/3が原告に属する。

#### § 130. 証人について

いかなる市外民 (gast) も、市民のために証人となることはできない。しかし市民は、市外民のために証人となることができ、市外民は、他の者（＝市外民）のために

証人となることができる。

§ 131. 寡夫と寡婦について（子供と、新たに帰属した財産の分割）

寡夫あるいは寡婦に子供がおり、彼らに財産が帰属するのであれば、それが、相続、贈与または獲得によるにせよ、それを、彼ら（＝寡夫あるいは寡婦）は子供と同じ割合において分割すべきである。ただし、その際、何らかの留保（vndersched）がある場合を除く。

§ 132. 船舶による損害について

ある者が、彼の船によって他の者の船に損害を与え、それが帆、櫂（ronde）、あるいは何によるにせよ、彼、即ち、その損害をひきおこした者が訴えられ、そして彼が、それは残念（led）なことであるが、彼はその損害を防止（bewaren）することはできなかったと、誓約によってあえて（dar）証明するのであれば、彼は彼に損失の半額（だけ）を支払うべきである。彼が誓約しないのであれば、彼はすべての損失を償うべきである。

§ 133. 船の法について

ある者が彼の船を人々に賃貸し、その船がその人々の意思により出帆し（schepende）、もしその船が航海中に破損するのであれば、用船者ら（vrucht lude）は、彼に船の積荷（vrucht）の半分を返還すべきである。

☆ § 107とはほぼ同じ。

§ 134. 分別（sinne）を失った者について

ある男あるいは女が、病気あるいは何らかの事由のために、分別を失ってしまうのであれば、彼らはいかなる財産も譲渡する（wech geuen）ことはできない。ただし、それが有効とされ、そしてそれが誰かによって保証されている場合を除く。

§ 135. 市参事会員について

もし人がある者を（新市参事会員として）市参事会庁舎の階段（louen）<sup>(1)</sup> から指名すべきであれば、彼を指名する者、彼の血縁者、そして姻戚関係にある者はすべて、市参事会庁舎から退去すべきである。

☆ § 128と内容的には同じ。

(1) 庁舎内の2階に上がる階段を指す。

§ 135. 市参事会員について（出席と任期）

市参事会庁舎の階段（louen）から指名された市参事会員が、市参事会庁舎に登庁

するのであれば、彼らは1年間在職していた者（＝市参事会員）を召喚すべきである。その後、彼らは、それよりも前に誓約を行っていた者を召喚することになる。ある者を指名する者は誰であれ、彼は退職すべきであり、そして指名された者の血縁者、そして姻戚関係にある者もそう（すべき）である。人がある者を新たに市参事に受け入れる場合も、人は同様にすべきである。

§ 137. 逮捕 (begripinge) について

ある者の娘または姪と一緒にいるところを、あるいは、1人の男あるいは1人の婦人に預けられている (beuolen) 女性 (wiuesnamen) と一緒にいるところを、逮捕あるいは拘束された者は誰であれ、その預けられた者（＝女性）が、彼ら (en) と食卓に着き、そして彼女が婦人たちと日曜日には教会を訪れていたのであれば<sup>(1)</sup>、彼は彼女を妻とすべきである。さもなくば、彼は彼女に銀40マルクを与えるべきである。

☆(1) 評判の良い女性という推定の根拠となるのであろう。

§ 138. 船舶について

ある者の船が我々の都市に入港するのであれば、人はその荷をただちに8日以内に下ろすべきである。しかし、その荷の持ち主である人々（＝荷受人）がそれをしないのであれば、彼らはその船の持ち主に、もし彼が訴えるつもりであれば、償うべきである。

〔追記〕 このような拙訳を、しかも2回に分けて、掲載することは、本特別号の趣旨に沿わないのではないかと幾分躊躇したのであるが、この作品は、訳者にとって、様々な意味で、大変思い出深い仕事であり、あえて収録をお願いすることにした。